

# 提案場面における提案前のコンテキストと話し手の表現選択

## 一年齢差のあるアメリカ人初対面課題達成談話に着目してー

新家理沙(筑波大学大学院生)

### 1. はじめに

アメリカ人の会話スタイルと社会・文化的背景との関係性については、これまでの研究で多く取り上げられている。なかでも重光(2004)は、アメリカ人の「理解を踏まえて会話をする」「話し手は意見をはっきり言う」「人間関係を親しさの度合いの高い関係に設定する」という文化・社会的背景が会話スタイルに影響を与えていると指摘している。特に3つ目の文化・社会的背景から、アメリカ人同士の会話は上下関係に重きを置かずに行われることが予測される。その一方で、提案はBrown & Levinson(1987)においてフェイス威嚇行為の1つとされ、その表現選択が話し手の聞き手との関係性の捉え方の影響を受けることが示唆される。では、年齢差のあるアメリカ人同士によって双方向に交わされる提案時の表現選択においては、参与者の上下関係は影響を与えているのだろうか。

本研究では、初対面・年齢差のあるアメリカ人同士が協働で1つの目的を達成するために行う談話(課題達成談話)を取り上げ、提案前の文脈を踏まえた提案時に使用される言語形式を分析し、参与者両者の使用の違いから上下関係が相互行為に与える影響について考察を試みる。

### 2. 先行研究

アメリカ人同士の談話における提案の研究は、参与者の言語形式やその使用頻度について多くなされてきたが(Jiang 2006, Edstrom 2015, 藤井 2018)、年齢の異なる参与者同士が双方向に提案する場面は扱われていない。新家(2022)は、年齢の異なる2者(教師・学生)が15枚のカードを並べ替えてひと続きのストーリーを作る課題を行う初対面課題達成談話(詳細は3.にて説明)を扱い、ストーリー展開に則ってアイデア提示がなされる場面の言語形式の使用頻度に関して、以下表1にある藤井(2018)の分類を用いて量的分析を行った。

表1 提案の場面で使用される言語形式の分類(藤井・金, 2014)<sup>1</sup>

| 言語表現の種類                                           | 使用例                                                                      |
|---------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| (1) 陳述文<br>緩和表現等を伴わない平叙文                          | See, but they do the same thing, he goes on his head.                    |
| (2) 緩和表現を伴った陳述文<br>緩和表現を用いた陳述文<br>(緩和表現は太字)       | this guy <b>looks like</b> he's looking for a solution, <b>somehow</b> . |
| (3) 陳述形式による疑問文<br>平叙文でありながら末尾が<br>上昇イントネーションで終わる文 | And then he probably asks him for help?                                  |
| (4) (一般形式の) 疑問文<br>(否定疑問文や付加疑問文等を含む) 疑問文          | Does he jump back over?                                                  |

分析の結果、教師は(1)陳述文、学生は(2)緩和表現を伴った陳述文の使用頻度が最も高いことが示され、参与者同士の上下関係が言語使用に影響を与えている可能性が示唆された。しかしこの研究は、各言語形式の使用傾向について明らかにしているものの、提案前の文脈と提案時の表現選択の関係性に焦点を当てた分析は行われていない。

<sup>1</sup> 表現の形に関する詳細な説明とともに分類が示されている藤井・金(2014)を著者がまとめたものである。

### 3. データ・分析方法

本研究では、上記2.の新家(2022)の対象データであるミスター・オー・コーパスを使用する。ミスター・オー・コーパスは異言語・異文化間比較研究のために収集されたデータ・コーパスであり、(1)課題達成談話、(2)1人語り、(3)会話の3種類で構成されている。実験協力者は女性のみである。社会的人間関係による言語行動への影響を観察することを目的としているため、上下・疎の関係である初対面の教師・学生ペアと、同等・親の関係である初対面ではない学生同士ペアの2種類のデータが収集されている。新家(2022)と本研究では、(1)課題達成談話の上下・疎である初対面の教師・学生ペア11ペアが扱われている。

課題達成談話では、実験協力者2名が15枚のカードを並べ替えてひと続きのストーリーを作る課題を行っている様子が記録されている。本課題は制限時間を設けていない。また課題を行う前に参与者たちにはストーリーには正解がないことを伝えているため、参与者たちは納得のいくまで課題に取り組むことができる。

本発表では、ストーリー展開に関する提案場面のうちこれまで言及されなかったカードやストーリー展開に関するアイデアを相手に提示する場面を取り上げ、提案前のやりとり・行為を特定した上で、提案時に使用されている言語形式について教師・学生の言語使用の比較分析を行う。提案前のやりとり・行為を特定するにあたっては金(2007)の「先行連鎖」の定義を援用し、「本連鎖(提案→受諾/拒否)の前に、提案と何らかの関連のある実質的発話から始まるやりとりもしくは行為」を提案の先行連鎖として抽出し、先行連鎖において(i)誰が(ii)何を行っているかに焦点を当て特定する。

### 4. 分析結果

分析の結果、以下の2つの先行連鎖のパターンにおいて提案時の表現選択の相違が見られた。具体的には「提案者の提案・被提案者の前向きな反応」先行パターンと「特定の行為の終了・被提案者の発話の開始」先行パターンである。

「提案者の提案・被提案者の前向きな反応」先行パターンとは、提案者によるストーリー展開に関するアイデアの提案と被提案者の受諾等の前向きな反応を示す発話・行為が先行する提案場面を指す。このパターンの提案場面では、教師は(1)陳述文、学生は(1)陳述文に加えて(1)陳述文以外の表現(2)緩和表現を伴った陳述文、(3)陳述形式の疑問文、(4)(一般形式の)疑問文を提案時の表現として選択していた。以下(1)は教師、(2)は学生の例である。

(1) 01:S: It looks like, [this happens and this happens, so (1.0) And this looks like after the stick broke he fell (0.7) maybe because his stick broke, but he was try[ing to jump. 【学生による提案】

02:T: [Okay.

03:T: [So, then that would go here then, right? (0.7) You fall, you get back up.= 【教師による01に対する提案】

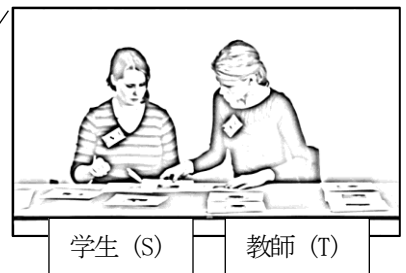
04:S: =Yeah, okay. 【学生による受諾】

05:T: This one ahh, let's go back over here this one is before=

【教師による提案】

06:S: =Okay, so, he sees the stick 【学生による受諾&カードの描写】

(E-03: 62-67)



(2) 01:S: He's walking (2.7) here (1.6) like he comes across like a cliff.=

【学生による提案】

02:T: =Yeah.

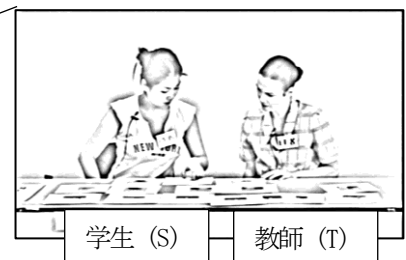
【教師による受諾】

03:S: And then, he, maybe he has an idea maybe this [(...)]

【学生による提案】

04:T: [Uh-huh. (...) it does look like that, huh 【教師による受諾】

(E-15: 27-30)



(1)では、まず01行目で学生がカードを並べながら中盤のストーリー展開に関して提案したのに対し、教師が03行目で学生が示したカードの並び順の変更を求めた提案を行っている。これを受け04行目で学生がYeah, okay. と受諾の意を示す発話をした後、教師はそれまで言及されてこなかったカードについて03行目時点のカードの並びに付け加える形で位置を示し、(1)陳述文を用いてストーリー展開に関して提案している。一方(2)では、01行目で学生がカードを指したり移動させたりしながら序盤のストーリー展開に関する提案を行っている。これを受け02行目で教師がYeah と受諾の意を示した後、03行目で学生は別のカードを指さし、(2)緩和表現を伴った陳述文を用いながら次のストーリー展開に関して提案をしている。以下図1は、上記で説明した先行連鎖から提案時までの流れと教師・学生の提案時の表現選択を図示したものである。

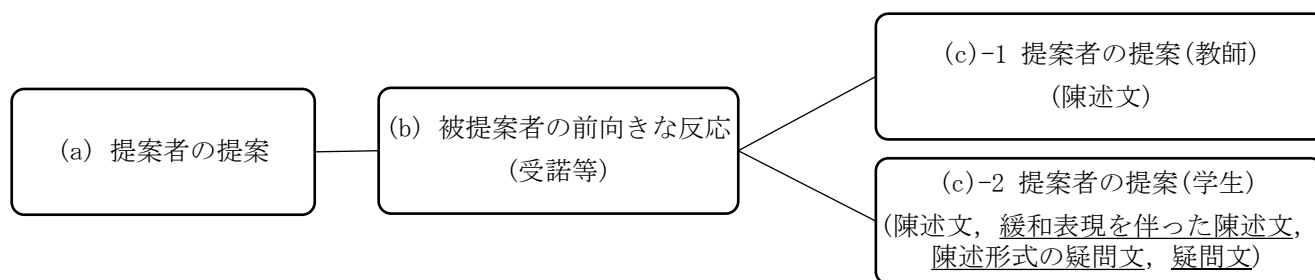


図1 「提案者の提案・被提案者の前向きな反応」先行パターン(パターン1)

次に「特定の行為の終了・被提案者の発話の開始」先行パターンとは、特定の行為の終了と被提案者の発話の開始が先行する提案場面を指す。このパターンの提案場面では、教師は(1)陳述文と(3)陳述形式の疑問文、学生は上記2つに加えて(2)緩和表現を伴った陳述文を提案時の表現として選択していた。以下(3)は教師、(4)は学生の例である。

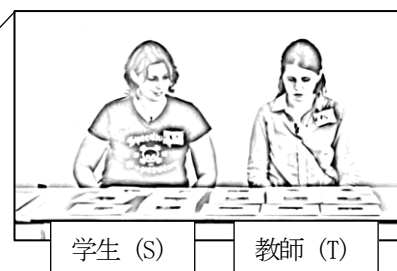
(3) (学生がカードを広げた後)

01:S: So (2.0) it looks like the general idea (2.0) [is that this little white guy is 【学生による発話(提案)の開始】

02:T: [is trying to figure how to get over the 【教師による学生の発話に続く形での提案】

03:S: wants to get over the the gap, right? 【学生による提案の帰結】

(E-09: 13-15)



(4) (学生がカードを広げた後)

01:T: Okay, well (3.0) Huh 【教師による発話の開始】

02:S: Maybe that's the first one. = 【学生による提案】

03:T: =Yeah, he's just walking around, okay?

【教師による受諾】

(E-11: 11-13)



(3)では、学生がカードを広げ「束になっていたカードを広げる」という行為が終了した後、01行目で学生が発話を開始する。ストーリーの大まかな流れについて提案を行おうとするものの、the general ideaの後に2秒の沈黙が起こり、それを受け教師が学生の01行目の文章に続くような形で(1)陳述文(省略あり)を用いながらストーリー展開の提案を行っている(02行目)。そして02行目で教師は発話を中断し、その後03行目で学生が02行目の教師の発話を一部繰り返しながらストーリー展開の提案を帰結に導いている。一方(4)では、(3)と同様学生がカードを広げ「束になっていたカードを広げる」という行為が終了した後、01行目で教師が発話を開始する。しかしwellの後3秒の沈黙が起こり、これを受け02行目で学生がカードを指しながら(2)緩和表現を伴った陳述文を用いて序盤のストーリー展開に関して提案を行う。その後、03行目で教師がYeah, he's just walking around, okay?と学生の示したカードの内容を言語化することで、学生の提案に対する受諾の意を示している。以下図2は、上記で説明した先行連鎖から提案時までの流れと教師・学生の提案時の表現選択を図示したものである。

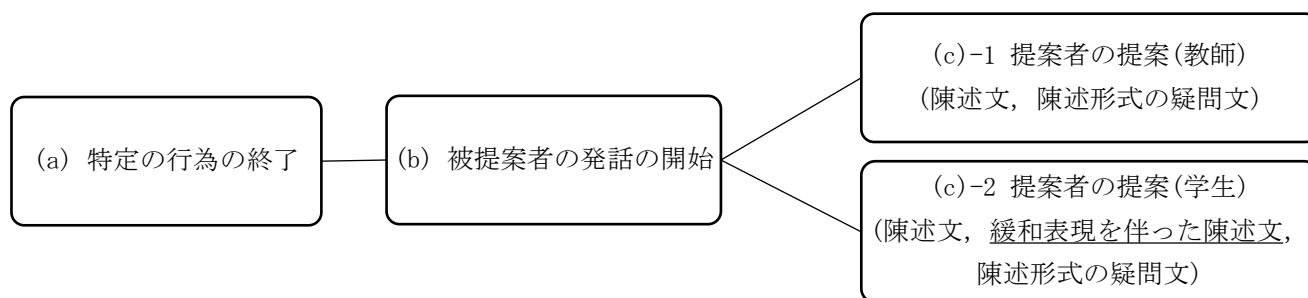


図2 「特定の行為の終了・被提案者の発話の開始」先行パターン(パターン2)

## 5. 考察と今後の課題

まず図1で示したパターン1では、教師・学生間での(a)提案者の提案の行為の違いが提案時の表現選択の違いに関連していると考えられる。教師のデータにおいては、上記(1)のように既に提示されたもしくは並べられたストーリー展開の変更を求める提案が大半であり、学生のデータにおいては、上記(2)のように(c)-2と同様のこれまで言及されなかったカードやストーリー展開に関するアイデアの提案の先行が大半を占めている。この両者の行為の後に行われる(c)-1, 2の提案はストーリー作りそのものを前に進めるものであり、(a) (b)を経た段階である程度推奨されていると考えられる。これらを踏まえると、教師が(a)で課題達成のプロセスにおいて後退を伴うストーリー展開の変更を行った後、(c)-1で直接性が高い表現を使用することによりストーリー作りを自ら前進させるための表現選択を行っているのに対し、学生は(a)で課題達成のプロセスにおいて達成に最も直結するストーリー展開の提案を行った後、(c)-2で更にストーリー作りを前進させる際に間接性の高い表現の選択肢を持っているということになる。一方図2で示したパターン2では、(b)被提案者の発話後に沈黙が伴うかどうか(c)-1, 2において(3)陳述形式の疑問文を選択するかの一因となっている。また沈黙が伴う場合の表現において、教師は(1)陳述文、学生は(1)陳述文と(2)緩和表現を伴った陳述文と選択に異なりがみられた。(b)被提案者の発話後の沈黙は、課題達成プロセスにおいてストーリー作りの進行の停滞を意味しており、このような場合、提案の行為はストーリー作りを前進させる上で推奨される可能性が高い。したがって、教師はストーリー作りを前進させるために直接性が高い表現選択を行っているのに対し、学生は教師に比べ間接性が高い表現選択の傾向を持っていると言える。以上のことから、両パターンにおいて提案という行為がある程度推奨されており、そのような状況下で学生が教師に比べ提案という発話行為の力を軽減する表現選択を行っているということが考えられる。つまり提案時の表現選択には学生から教師への「譲歩」の姿勢が見られており(新家, 2022)、参与者の上下関係が表現選択に影響を与える一因となることが示唆される。

本発表で分析対象とした場面は協働作業の初期段階における相互行為であり、談話において参与者の関係性は流動的であることも考えられる。そのため他の提案場面(既に作られたストーリーに変更を加える場面等)について先行する提案前のやりとり・行為と提案時の表現選択の関連性について分析・考察することが不可欠である。また今後は教師・学生の表現選択の類似点にも着目し、アメリカ人会話において上下関係が相互行為に与える影響について多角的に考察していきたい。

## 参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987 [1978]). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Edstrom, A. (2015). Making Suggestions While Collaborating in L1 English: Common Structures and Strategies. *Miscelánea: A Journal of English and American Studies*, 51, 27-48
- 藤井洋子 (2018). 「個を基体とする言語行動」と「場を基体とする言語行動」—英語・中国語・日本語・韓国語・タイ語の比較より— *社会言語科学*, 21(1), 129-145.
- 藤井洋子・金明姫 (2014). 課題達成談話における相互行為の言語文化比較—日本語・韓国語・英語の比較分析 井出祥子・藤井洋子(編) *解放的語用論への挑戦—文化・インターアクション・言語* くろしお出版 pp. 57-90.
- Jiang, X. (2006). Suggestions: What should ESL students know? *System*, 34, pp. 36-54.
- 金庚芬 (2007). 日本語と韓国語の「ほめの談話」 *社会言語科学*, 10(1), 18-32.
- 重光由加 (2004). 何を「心地よい」と感じるか 会話のスタイルと異文化間コミュニケーション 井出祥子・平賀正子(編) *講座社会言語科学【第1巻】異文化とコミュニケーション* ひつじ書房 pp. 216-237.
- 新家理沙 (2022). 課題達成談話における教師・学生の言語的特徴からみる日米の協力体制の構築 —提案の場面に焦点を当てて— *待遇コミュニケーション研究*, 19, 18-34.